卓　話

『真珠湾攻撃について学び、考えてきたこと』

荻　野　正　和 会員

本日、お話しさせていただくテーマ

1　本日、このテーマを選んだ理由
2　私にとっての太平洋戦争
（どうしてこの戦争が起こったのかを考えるのは、私のライフワーク）
3　真珠湾攻撃の概要
4　真珠湾攻撃について、私が考えてきたこと

2

1　本日、このテーマを選んだ理由

- もともと、卓話で太平洋戦争のことを話すのは、全く考えていませんでした。
- 昨年12月9日の例会にて、三木政司会員、上林会員、森崎会員と同じテーブルでご一緒させていただいたとき、最後にほんの数分、真珠湾攻撃のお話が出ました。
- 三木政司会員とのお話が途中となりましたので、最後に、三木政司会員にも、続きを聞いていただけるのではないかという思いから、本日の卓話のテーマとさせていただきました。

3

2　太平洋戦争は、私のライフワーク

- 私が太平洋戦争に興味を持ったのは、10歳くらいのころ。
- 10歳くらいから中学卒業頃まで、太平洋戦争の戦史を読み漁り、大人になってからは、「どうして、日本は太平洋戦争をしたのか？」ということを考えてきました。
- 今では、じっくりと考える時間は減りましたが、全く飽きることはありません。

（理由）
・いくら考えても、明確な正解は分からないから。
・資料の公開や研究が進むなどして、様々な著書も出されるから。
・自分自身、社会人経験を積み、当時の人々への想像が具体的にイメージしやすくなったから。
・私が歴史マニアだから。

4

3ー１　真珠湾攻撃がどのようなものであったか

- 日本海軍機動部隊が、1941年12月8日、ハワイオアフ島のアメリカ軍太平洋艦隊の基地、真珠湾に接近し、航空機等をもって奇襲攻撃した。
- 参加艦艇：航空母艦6隻、戦艦2隻、重巡洋艦2隻、軽巡洋艦1隻、駆逐艦9隻、潜水艦8隻（特殊潜航艇5隻）
給油艦8隻。
- 航空攻撃の内容（記事によって異なります。）
①第1次攻撃隊：戦闘機43機、急降下爆撃機51機、
艦上攻撃機89機
②第2次攻撃隊：戦闘機36機、急降下爆撃機81機、
艦上攻撃機54機

5

3-2　私が学んできたこと①（真珠湾攻撃が可能となった要因）

①航空機性能の急速な進化
・日本海軍航空隊がはじめて実戦参加したのは第1次大戦（1914～1918）
・日本で最初に航空機を船に積んだのは、1922年
⇒　それから20年の間に、航空機は著しい進歩を遂げた
※ただし、依然として、第2次世界大戦がはじまる当初は、依然として海戦の勝敗は、依然として戦艦であると考えられていました。
現に、ヨーロッパ戦線では、最新鋭戦艦同士の砲撃戦が行われた。

②日本海軍の開戦直前の戦力充実が（幸か不幸か）真珠湾攻撃を可能にした
・正規空母が次々に就役。最新の海軍航空機が次々に誕生。
（開戦直前3年ほどの間に、急速に航空戦力が拡大。）
⇒日本海軍は、逆に対米戦争を拒否しにくくなったという側面も。

6

3－2　私が真珠湾攻撃から学んだこと②

- 太平洋戦争へと向かう日本の苦悩
○日独伊三国同盟締結後、対米英関係は悪化。対米英戦争の危機に。
○太平洋戦争開始の半年前の時点でも、日本は国家としての方針は決まらないまま（「真っ二つ」に近い）。
・北進論⇒ソ連方面に進攻する
（※1941年6月22日の独ソ戦開始後、「関東軍特殊演習」。）
・南進論⇒東南アジア方面に進攻する南進論
○陸軍の仮想敵国はソ連。海軍の仮想敵国はアメリカ。
- 対米英開戦論・南進論の方向性となった時期⇒（開戦に積極的であったとされる）陸軍参謀本部でさえ、開戦の年（昭和16年）の8月であった（南部仏印進駐に対する、アメリカの石油禁輸後）。それまで、陸軍は太平洋の島々をめぐる戦いを全く想定していなかった。※「大本営参謀の情報戦記」（堀栄三。当時の情報参謀著）は、陸軍の対米戦についての反省を率直に振り返っている。

7

3-3　日本海軍の苦悩（作戦実施の決定までの推移　その1）

- 日本海軍の仮想敵国はアメリカ。ただし、アメリカの国力もよく知っていたし、「日本は、戦争に必要な石油も鉄も、アメリカから輸入している」という現実を直視する海軍首脳もいた。
⇒しかし、アメリカの対日石油禁輸により、海軍の中に、対米開戦やむなしの風潮（「12年経つと、油がなくて軍艦は動かなくなる」）
- 日本海軍の伝統的な対米戦の戦略は、日本海海戦による歴史的勝利と同様、大艦隊同士の海戦で勝つことを想定。
⇒アメリカ艦隊が大挙して押しかけてくるのを待ち受け、潜水艦などの補助的な戦力を使ってアメリカの戦力を低下させ、最後に、戦艦を中心とする大艦隊で勝敗を決するという作戦計画。（「専守防衛」の発想）
⇒真珠湾攻撃の構想は、こうした海軍の伝統的戦略を完全に覆すものだった。

8

3－4　真珠湾攻撃の構想とハードル①（作戦実施の決定までの推移　その２）

- 真珠湾攻撃を発案したのは1941年はじめ、山本五十六連合艦隊司令長官

9

３－４　真珠湾攻撃の構想とハードル ①（作戦実施の決定までの推移　その２）

ハードル①：伝統的戦略を覆すことについて、海軍内部での了解が得られるか？

（日本海軍の作戦決定の権限は、陸軍でいう「参謀本部」にあたる「軍令部」にあった。）

⇒　軍令部の承認が得られない限り、真珠湾攻撃は実施不可能。

10

３－５　真珠湾攻撃が決定されるまでの海軍内部のプロセス

▶ 海軍軍令部の反応：当初、真珠湾攻撃が余りにも危険が大きいという危惧を強く有していた。

⇒　真珠湾攻撃を行うかどうかの検討に際して、軍令部内で模擬演習が行われました。結果は、敵戦艦5隻と空母2隻の撃沈撃破と引き換えに、味方空母4隻中3隻沈没と1隻大破で機動部隊全滅という結果になり、軍令部の危惧を裏付けた。

▶ 1941年10月19日、連合艦隊先任参謀の黒島大佐が、「この作戦が認められなければ、山本長官は連合艦隊司令長官を辞任すると仰っている」と、軍令部次長伊藤整一に発言。

⇒これに驚いた永野修身軍令部総長が、ついに作戦を認めた。

11

３－４　真珠湾攻撃の構想とハードル②（作戦実施の決定までの推移　その２）

▶ ハードル②：真珠湾攻撃に必要な条件をクリアできるのか？

○物理的ハードル：日本からハワイまで約5500キロもある。

⇒燃料補給をどうするか？　油槽船を同行させて海上給油

○奇襲攻撃が可能か（見つかって先制攻撃されるリスクは甚大）

⇒「海が荒れるため船舶の航行が少ない」北方航路を採用。

○戦術的には、

①真珠湾の水深が浅く、魚雷攻撃ができないのではないか、

②アメリカ戦艦の厚い装甲を航空機攻撃で貫通させられるか、

③投入する戦力（空母）を何隻にするか？

12

３－６　真珠湾攻撃当日の経過

1　機動部隊は、発見されることなくハワイ近海に到達。攻撃隊発進。

2　アメリカ軍に働いた正常性バイアス。

ⅰ　航空攻撃に先立ち、日本の特殊潜航艇がハワイのアメリカ駆逐艦に発見・撃沈された。太平洋艦隊に報告されていたが、警戒が強められることはなかった。

ⅱ　日本の空母を発進した航空攻撃隊の大群がアメリカ軍レーダーに捉えられたが、当日に来る予定であったアメリカ軍航空機と早合点され、警戒をすることがなかった。

ⅲ　真珠湾攻撃に先立ち、日本陸軍がマレー半島コタバルに奇襲上陸していたが、アメリカ軍に伝達されたのは遅か後。

⇒　これらの事情が重なって、日本海軍航空隊の攻撃は、完全な奇襲となった。

13

３－７　真珠湾攻撃の結果

▶ 日本軍の損害　未帰還航空機29機、特殊潜航艇5隻

▶ アメリカ軍の損害　戦艦4隻沈没をはじめ、艦艇の損失甚大。
航空機も壊滅的被害。
2300人以上が戦死。
ただし、空母は真珠湾におらず無傷。

（その他の影響）

・事前の宣戦布告がなかったためアメリカ世論は激高

⇒早期講和の道が断たれ、外交による解決はほぼ不可能となった。

・原爆投下の際、トルーマン大統領は「原子爆弾がこの戦争を引き起こした敵の上に解き放たれた」と演説。

※「俺たちは死力を尽くして戦うだけだが、戦争の後始末はどうやってつけるつもりなのかな」（真珠湾攻撃を知らされた板谷茂少佐が漏らしたという言葉）の答えは、日本の誰も持ち合わせていなかった。

14

４－1　真珠湾攻撃をめぐる論争テーマ

Ⅰ　そもそも、日本海軍は対米戦争を拒否できなかったのか？

※海軍軍人には、山本長官をはじめアメリカの国力を知る人物は多かった。

※既に9月6日の御前会議にて、国家として対米開戦の方針を確認した後になって、海軍は、南方戦争に自信がないという申し出て、「対米戦、待った」という態度を示した（※海軍は、年140万トンもの船舶を撃沈される可能性があると言い出し、これに対し、陸軍参謀本部中堅幕僚は、「海軍の無責任、不信、正に国家を亡ぼすものは海軍なり」と憤激していた。「機密戦争日誌」）。

Ⅱ　アメリカ軍は、この攻撃を事前に知っていたのではないか？

Ⅲ　攻撃隊は、アメリカの艦隊及び航空機のみならず、巨大な燃料タンク、海軍工廠、弾薬等の施設を攻撃しなかったのは失敗だったのではないか？

Ⅳ　日本は、暗号解読が遅れて宣戦布告が出来なかっただけで、だまし討ちにするつもりはなかった。

15

さいごに（真珠湾攻撃後の推移①）日本海軍空母のその後

▶ 空母6隻は、その後、緒戦で目覚ましい戦果を挙げた（機動部隊の威力を全世界に知らしめた。）。

▶ しかし、1942年6月、空母赤城、加賀、蒼龍、飛竜の4隻は運命のミッドウェー海戦にて沈没。

空母翔鶴は、1944年6月、マリアナ沖海戦で沈没。

空母瑞鶴は、1944年10月、戦艦部隊のフィリピン突入を助けるための囮艦隊となって沈没。

16

さいごに（真珠湾攻撃後の推移②）第1次攻撃隊指揮官たちのその後

・高橋赫一艦爆隊隊長：1942年5月、珊瑚海海戦で戦死。

・村田重治雷撃隊隊長：1942年10月、南太平洋海戦で戦死。

・板谷茂戦闘機隊隊長：1944年7月、日本陸軍誤射で戦死。

（ウィキペディア情報）

・淵田美津雄隊長（水平爆撃）：戦争を生き残り、キリスト教伝道者となり、アメリカで活動。

⇒緒戦で目覚ましい戦果を挙げたが、優れたパイロット（人材）を次々と失っていく闘いであったことが分かります。

17